

---

---

# プラトンと書かれたテキストの問題

金山 弥平

〈名古屋大学〉

---

本国際集会「哲学的解釈学からテキスト解釈学へ」において、ガダマーは一つの焦点である。残念ながら私はガダマーの研究者ではない。古代哲学者プラトンの専門である。ここではガダマーの足跡に従い、彼も解釈を試みているプラトンの解釈をとおして、テキスト解釈の問題について考えてみたい<sup>1</sup>。

## 1. プラトン『パイドロス』に書かれた、タムスによる書き物への批判

プラトンは『パイドロス』において、ソクラテスに書き物への批判とも受けとられる物語、文字の発明に関するエジプトの物語を語らせている。それは次のとおりである (274Cff.)。

エジプトのナウクラティス地方にテウトという名の神がいた。この神は、数、幾何学、天文学、囲碁や双六に似たゲームを考案したが、加えて文字も発明した。彼は神の王タムス (すなわち、アンモン) を訪れたおり、それぞれの技術・学問の効用を説明し、人々にそれらを伝授する必要性を訴える。話が文字に及んだとき、テウトはそれを誇って、これは記憶 (μνήμη) と知恵 (σοφία) の薬 (φάρμακον) であり、エジプト人をより賢くし、その記憶力を向上させると語る。これに対してタムス (また続いてソクラテス) は書かれた言葉の問題点を指摘するのである。

- (1) 筆記は、学ぶもののうちに忘却をもたらす。なぜなら、学ぶものは、筆記を信用し、記憶の訓練をおざりにするからである (μνήμης ἀμελετήσις)。彼らは、外的な文字によって生み出された書かれたテキストを信頼し、自分で内部から想起 (αὐτοὺς ὑφ' αὐτῶν ἀναμνησκομένους) しようとはしなくなる。テウトが発見したのは、心覚え (思い出させること、ὕπομνησις) の薬であって、記憶の薬ではない (275A)。
- (2) 人は実際に教えられることなくただ多数のことを聞くだけのものとなり、実際には知恵がないのに知者とみなされ、つきあいにくいやっかいな者となる (275A-B)。
- (3) 書かれた言葉は、書かれたものが関わる対象について、すでに知っている人に思い出させる覚え書 (ὕπομνησαι) にすぎない (275D)。
- (4) それは絵画に似ていて、尋ねても厳かに沈黙し、何も答えることなく、一つの合図をするだけである (275C-D)。
- (5) いったん書かれると相手構わず、ふさわしくない人のところにも赴く (275D-E)。
- (6) そうした折には、不当な扱いに会っても自分で自分を守れない (275E)。

---

1 本論文の一部は Kanayama (2009) に基づく。また一部、研究集会の後で付け加えた部分もある。なお本論文日本語版は、英語版と逐語的に対応しているわけではない。

エジプトの物語を踏まえてソクラテスが評価するのは、知識とともに、学ぶものの魂のなかに書き記され、自らを守ることができ、またしかるべき相手に対して語ることに沈黙することを心得ているロゴス（言葉、理性）である。それをパイドロスは、「知っている人の、生きていて魂をもったロゴス（λόγος）——書かれたロゴスがその何か似像（εἶδωλον）であると正当に語られうるもの」と呼ぶ。（276A）

最後にソクラテスは、二種類のロゴスの比較に基づき、次のような態度を勧める。

諸々の正しいこと、美しいこと、善きことに関するいろいろな知識をもっている人は、インクとペンで書き記すことをまじめな営みとはみなさない。彼が何ごとかを書き記し、文字のなかの果樹園に種を蒔くときには、「戯れ」（παιδιά）の意味で、「覚え書」（ὑπομνήματα）として、一つには自らの忘却（λήθη）の老いに備え、また他方では、同じ足跡をたどる人のために（ταυτὸν ἵχνος μετιόντι）、書き記すのである。（276C-D）

より美しく、また真剣に携わるに値すること（σπουδή）は、問答の技術によって適切な魂のうちに種蒔くことである。そのようにして植えつけられた言葉は、その言葉それ自体と種を蒔いた人の双方を助けることのできるものであり、果実を結ばないものではなく、種を産み出し、またそこから別の言葉が別の性格のなかに生まれ育ち、その種は永遠に不死のものとなり、またそれをもつ人は人間に可能なかぎり幸福なものとなる。（276E-277A）

確かにここには、書き物に対する否定的な評価が認められる。しかし、プラトン自身は、ギリシアの作家のなかでも非常に多く書物を著わし、その書いたものが、今日、最も多く残っている思想家の一人である。否定的評価は、彼の活動と一致しないように思われる。また『パイドロス』以外の別の箇所では、文字に対して好意的と受けとられる発言も、彼はしている。例えば『ティマイオス』23A, E、『クリティアス』113A-Bでは、エジプトにおける文書の保存のお蔭で、かつてのアテナイの栄光とアトランティスの物語が今日にまで伝えられていることに言及している<sup>2</sup>。『パイドロス』のエジプトの物語のなかで、テウトは文字を自慢しているが（274E）、プラトン自身、間違いなく、人類に対する文字の大いなる貢献を意識していたはずである。

さらに、プラトンが、書かれたものは「戯れ」にすぎず（276D, 278C）、これまで真剣な注意に値するのは書かれたためしがない（277E）と言っているのは、彼自身筆をとって記した書き物のなかでのことである。これは、真剣に取り合うべきではないという書かれた言葉に対する批判も、それ自体「戯れ」にすぎないという可能性を示唆する<sup>3</sup>。また、問題点(6)は、プラトンのメッセージに対するわれわれからの不当な扱いについて警鐘を鳴らす。読者がこの『パイドロス』のテキストに、書かれたものに対する否定的姿勢を安易に読みとるなら、それ自体「不当な扱い」になるかもしれない。プラトンのテキストはわれわれに適切な「解釈」を要求している、あるいはそれができかどうか挑戦しているようにも思われるのである。

## 2. 記憶の限界

『パイドロス』に記された物語は、デリダの‘Plato’s Pharmacy’（「プラトンのパルマケイアー」）<sup>4</sup>や、リクールの『記憶・歴史・忘却』をはじめとして、多数の解釈者に多数の言論を書かせることになった。『パイドロス』におけるプラトンの子どもが後世の人々によって、親のいない状態で、適切に、あるいは不適切に、多数の仕方では取り扱われていると言えるかもしれない。それらすべての言論を扱おうとするなら、あるいは

2 Blair (2010), 271 n. 10.

3 Mackenzie (1982), 65.

4 In Derrida (1972).

一つか二つ扱おうとする場合でも、私自身、保護者たる親のいない状況でそれらを不当に扱うことになるかもしれない。それゆえここでは、プラトンが書き遺したものに限定し、できるだけ彼の足跡を追っていく試みをしようと思う。

「解釈」の一つの試みを行なうにあたって、そもそも文字は、それ自体としてどのような影響を及ぼしうるものなのか、また古代ギリシアにおいて、紀元前800～750年頃（プラトンの生きた時代より約400～350年前）に導入されたアルファベットがどのような影響を与えたのか、という問題をまず最初に考えてみたい。文字の使用をもって書き物の文化が始まる。文字を使用しうる社会と無文字社会の違いを考える場合に念頭に置くべきは、書いたもののせいでなおざりにされるとプラトンが語る記憶のある一つの側面——人間の記憶力の限界の問題——である。ハードディスク的な記憶力を有しているサバン (savant) と呼ばれる人は別として、ふつうの人間の記憶力は限られている。われわれの脳のワーキング・メモリーには限界があり、一般に、一度に7つ程度のものしか処理できないようになっている<sup>5</sup>。電話番号が通常7ケタであるのもそのためである。そのような限られた記憶でうまく生活に対処していくため、われわれは、経験した事実をそのまま写真的に記憶に留めたり、読んだ文字や聴いた音声をそのままコード化して、脳のハードディスクに取めたりすることはしない。例えば数字にしても、一度見たり聞いたりしただけで記憶がカバーできる範囲は通常、7個までであるところから、1984747365という10ケタの数字はなかなか覚えられないし、たとえ覚えたとしても10分も覚えてはもらえない。しかし、長い数字の列を覚える特別の方法がある。すなわち、イメージや物語を利用し、抽象的な数字の列に印象的な意味を付与するのである。例えば、ジョージ・オーウェル (1984) がジャンボジェット (747) に一年間 (365) 乗りつづけている姿を想像するなら、1984747365という数字は、長いあいだ、覚えていることが可能となる<sup>6</sup>。

われわれにとって無意味なものを記憶にとどめておくことは非常に困難である。われわれは何かを覚えるとき、それを、すでに記憶しているものと結びつけ、解釈し、われわれ自身の観点から理解可能なものとする。バートレット (Bartlett) が行なった実験によれば「幽霊の闘い」(The war of the ghosts) という超自然的存在への言及を含むネイティヴ・アメリカンの話を被験者に聞かせ、それを思い出して語らせたところ、被験者はその話を、自分にとってより理性的で意味をなす話に作り変えて語った<sup>7</sup>。バートレットの「スキーマ理論」によれば、われわれは、自分の過去の経験（それは人によって異なる）に基づいて、知覚し、情報を記憶に収める<sup>8</sup>。この過程により、われわれの記憶装置に入ってきた情報は、われわれの脳のキャビネットに収まるように変化を受け、場合によっては歪められさえするのである。

しかし、この種の歪みが生じるのは、記憶を収納するときに限られない。われわれの記憶は、取り戻されるときにも変化を受けるのである。記憶は、われわれの脳の奥底の図書館に収納された古い書き物のようなものではない。脳細胞の間には「シナプス間隙」というギャップがあり、われわれが何かを思い出すそのたびに、この間隙は架橋される必要がある。またこの過程において、別の道に通じる新しい橋が建設されることも十分ありうるのである。「われわれが何かを思い出すそのたびに、記憶の神経構造は微妙に変形され、再固定化 (reconsolidation) と呼ばれる過程をこうむる」<sup>9</sup>。「思い出す」と呼ばれるそれぞれの行為は、解釈の新たな試みであると言っても過言ではないのである。

もしも記憶が図書館の古い本のようなものであるとすれば、われわれは事実を知ろうとして書棚からとっ

5 Miller (1956).

6 Groome (2006), 141.

7 Bartlett (1932), 65, chap. X (A Theory of Remembering), 197–214; Goody and Watt (1963), 307; Groome (2006), 136–7.

8 Groome (2006), 6, 137.

9 Lehrer (2007), 85, also 82ff. Cf. also Tronson and Taylor (2007).

てきた情報を信頼すれば、それで何の問題もないであろう。しかしそうではない。またたとえそれらが本のようなものであるとしても、その本はわれわれがそれを読むたびに、われわれの考えや期待に従って内容の変わるようなものである。そのような歪曲を防ぐ唯一の方法は、中身が変わらない固定化した信頼できるテキストをもつことである。ここにおいて、書かれたテキストの欠点として『パイドロス』で語られていたこと（上述の(4)）が長所となる。厳かに沈黙し、つねに同じ合図をするということは、少なくともその形式につき、読み手の理解に従って歪められることに抵抗しうることを意味するのである。

### 3. 探求（ヒストリエー）の助けとしての書き物

固定化された文書を利用できるということは、文字社会と無文字社会の大きな違いを生み出す。文字のない世界で言語が学ばれるのは、対面的な社会生活のなかにおいてのことである。顔と顔を突き合わせての会話においては、目の前の具体的事物を共有し、ともに見ながらそれを指示しつつ行なわれるコミュニケーションが主となる。その意味で、現実はずねにそこに文字どおり「現に実在」し、言葉が、現実に取り添う形で修正を受けつつ発展していくことになる。「社会的に重要なことは記憶に保存され、残りのものは通常忘れられる」<sup>10</sup>のである。そのような社会では、「オリジナルという概念そのものが意味をなさない」<sup>11</sup>。オリジナルが存在しないがゆえに、現状を過去から受けついでものと比較することはできず、そのため過去のものに基づいて現在のものを批判することも、またその逆も困難になる。比較し、批判するためには、それが批判対象であれ、あるいは批判の踏み台として用いられるものであれ、われわれは固定的な支点を必要とするのである。

母音と子音からなるわずか24の文字から成り立つギリシアのアルファベットの発明および普及とともに、そのような変わらざる比較対象を得ることが可能になり、またさらに容易にもなる。それらの比較対象は、過去から得られるものにかぎられない。比較的軽いために持ち運びに容易で、またかなりの情報を書きこむことができるパピルスのお蔭で地理的に遠い地からも、比較のための情報は得られるようになった。アガテメロス『地理書』1.1 (DK 12A6; KRS 98) には次のように記されている<sup>12</sup>。

ミレトスのアナクシマンドロス [前610～540年頃] ——タレスの弟子——は最初に、人の住む地を書き板の上に書こうとあえて試みた。その後、ミレトスのヘカタイオス [前6～5世紀] ——多く旅行した人——が、それをより正確なものにし、出来たものは驚きの的になった。

ヘカタイオスは、最初の歴史家とされる作家であり、また彼自らの探求と合理的分析に基づいて地中海世界の習俗と人々の記録を書きとどめようとした最初の散文作家であった<sup>13</sup>。彼は『周航記』と『系譜』（または『歴史』）を著わしたが、後者は次のような書き出しで始まっている。

ヘカタイオス、ミレトスの人は次のように述べる。私は、私にこれが真理であると思われるとおりに次のように書き記す。というのも、私が一見したところ、ギリシア人たちの言論は数多く、また笑止なものだからである。（ヘカタイオス「断片」一）

彼は唯一、ヘロドトス（前490頃～430年頃）が名指して言及する散文作家であり、ヘロドトスはヘカタイオスを批判はするものの、しかしまた評価もしている（2.143, 5.36）。彼はヘカタイオスの理性的探求方法

10 Goody and Watt (1963), 306–307.

11 Goody (1987), 170.

12 ストラボン『地理書』第1巻第1章1節、11節も参照。

13 De Sélincourt (2003), xviii ff.

が重要なものであることと、また同時に自分自身の探求がヘカタイオスのそれより優れていることを強く意識しているのである。ヘロドトスはヘカタイオスにならって、自分の名前と出生地を著作の最初に置いている。

ヘロドトス、ハリカルナッソスの人による探求（ヒストリエー）の提示、それは次のとおり。実際に生じたことが時とともに人々のあいだから消えてしまうことのないように。（ヘロドトス『歴史』序）

「探求」は、英語の history の語源「ヒストリエー」の訳である。アルファベットの発明とともに、参照のための確固とした立脚点が得られるようになり、それによって探求、および歴史や地誌の記録が可能になり、先人や同時代人を批判することが可能になったと言ってもよい。第3の著名な「ヒストリエー」の著者、トゥキュディデス（前460頃～400年頃）もまた、彼の『歴史』の冒頭に自分の名前と出生地を置いている。

トゥキュディデス、アテナイの人は、ペロポネソス人とアテナイ人のあいだの戦いについて、彼らがたがいにもどのように争ったかを書き記した。（『歴史』1.1）

彼らはすべて、自分の名前を著作の先頭に置くことによって、自分がこれら優れた子どもたちの親であることを明確にしたかったにちがいない。それによってこの世での生は限られていても、永遠の命を得ることができるのである。プラトン『饗宴』（209D-E）は、人間はだれでも不死を目指す、しかし個人ではそれが不可能であるところから、代理の不死として、肉体の子ども、また思想的な子どもを後世に残そうとする、と記している。文字の技術そのものが、テウトの子どもであり、それに対する愛情が、それが現に及ぼしうる効果と反対の効果を、テウトに語らせたのである（『パイドロス』275A）。

#### 4. 書くこと、記憶すること、そして探求すること

これら歴史家たちは自らを探求者として意識していたのであるが、哲学者（＝知を愛する者）としてのプラトンも確かにそうであった。しかし、プラトンには、自分の子どもを残すこと以上に重要なことがあった。ソクラテス的探求の足跡をたどろうとした彼にとっては、探求こそが最重要の課題であったはずである。書き物に対するタモスの批判のいくつかの側面は、書き物が探求を促進するかどうかを焦点としている。そしてこの目的からすると、書かれた物を所有し、同じことを何度でも好きなだけ確認できることが確かに望ましい。実際、『パイドロス』においても、ソクラテスはパイドロスがリュシアスの弁論を読むのを聞いていたにもかかわらず、その最初の部分をもう一度読むように求めるのである（262D）。パイドロス自身、リュシアスによる弁論の朗読を何度か聞いたにもかかわらず、さらに何度もテキストに戻って調べている。

『パイドロス』は、散歩をしているパイドロスとソクラテスの出会いから始まっている。パイドロスは散歩をしながら何をしていたのであろうか？ 彼は、リュシアスの弁論を携えて、暗記しようとしていた（228A-E）。確かに書き物は記憶を妨げ、忘れっぽさを植え付けるかもしれないが、しかし、テキストを記憶しようと思うときにも、同じテキストを何度も朗唱してくれる人よりも、繰り返しそこに立ち返って文字どおりのテキストを確認できる書き物の方が、はるかに役に立つ手助けとなるのである<sup>14</sup>。

それにまた、タモスの批判とは異なり、ギリシアとローマの記憶術の発達は、蠟の書き板に筆記するイメージによって大いに促進された。キケロ『弁論家について』第2巻351ff.によると、詩人シモニデス（前556～468年）が金持ちのスコパスの館での宴席に連なっていたところ、だれとも分からない二人の人から呼び出された。彼らは実際には、シモニデスとその詩のなかで称えたカストルとポリュデウケスであった（その

14 Goody (1987), 234.

ために、シモニデスは、スコパスから報酬を半分しかもらえないことになったのである)。シモニデスが外へ出てみたところ、そこにはだれもいなかった。ところが彼が宴会の席を外しているあいだに会場の天井が崩れ落ち、そこに居合わせた人々はみな押しつぶされてしまい、だれがだれか見分けることができなくなってしまった。しかし、シモニデスは自分の記憶を頼りに、それぞれの人の座席を正確に言い当てることができ、それによって一人一人を間違いなく埋葬することができた。その後シモニデスは、記憶の秘訣は順序だということを見出した。キケロは『弁論家について』を次のように続けている(第2巻354)。

かくして、能力のこの部分を訓練しようとする者たちは、諸々の場所 (locus) を選び、記憶にとどめたいと思うもののイメージを魂によって描き出し、それらの場所の中に位置づけるべきである。そうすることによって、場所の順序 (ordo) が物事の順序を保持し、物事のイメージは物事そのものを指し示し、そしてわれわれは、諸々の場所を蠟の書き板代わりに、また諸々のイメージを文字代わりに使うことになるであろう。(『弁論家について』第2巻354)<sup>15</sup>

書くことに伴う空間的イメージがギリシア記憶術の枠組みを構成していることは明らかである。シモニデスの記憶術において、人はイメージを置くべき場所として、縮尺された自然的、あるいは人工的風景を設定する。また多数のことを記憶しようとするときは、多数のイメージを配置できるように多数の場所を準備する<sup>16</sup>。パイドロスが城壁の外で散歩しようとしていたとき (227A)、彼はリュシアスの弁論を暗記しようとしていた。彼は、彼自身の心のなかの蠟の書き板を用いて、イリソス川に沿った自然的風景のなかにリュシアスの弁論の各語をイメージとして配置しようとしていたのかもしれない。

確かに、現実の蠟の書き板のなかにであれ、あるいは、心のなかの蠟の書き板のなかにであれ、何かを視覚化して表わすことは、記憶するためにも、また吟味するためにも有益なことである。パイドロスは、愛するリュシアスの作品がソクラテスによって批判されるのを好まないが (264E)、しかしいったん書き物になると、何度もそこに立ち返って吟味できるため、批判を免れることはできない。その際、それが目に見える形で示されるなら、批判と吟味はより容易になる。ある場合には、書き物としての子どもが不当な扱いを受けることもありうるだろう (先の問題点(6))。しかしそのような可能性があるとするれば、それだけによりいっそう文字の技術が必要になってくる。なぜなら、不当な批判によって、子どもが傷つくということができかねるかぎりないように準備する必要があるからである。よく防備された言論を構築する最上の手段の一つは、論述の無矛盾性、精確さ、的確な根拠づけ、繰り返しの無さなどの確立であり、このことはまた、書き物として表わすことによって大いに助けられるのである。

『パイドロス』では弁論の構成として、生きものの身体のように、頭も足も、真ん中も端も欠けることなく、たがいに、また全体に対してもバランスよく組み立てられているということが求められている (264C)。バランスの吟味は、一つの空間のうちでの視覚的把握、すなわち書き物として表わすことなしには、われわれのワーキング・メモリーの限界のゆえに不可能であろう。頭も足も、真ん中も端も、同時的に一つの視野のもとに収めることができれば、バランスの吟味は確かに容易になる。ソクラテスは、ミダスの墓に刻まれた碑銘について、頭と足と入れ替えても変わらないと言って批判している (264D)。プラトン自身、他のだれよりも、言葉の配置にこだわったことは、彼が80歳になっても自分の対話篇になお手を加えつづけた、そして死後、『国家』の冒頭の数語 (κατέβην χθὲς εἰς Πειραιᾶ μετὰ Γλαύκωνος τοῦ Ἀρίστωνος, [私は] 下っていった、昨日、ペイライエウスへ、グランコントともに、アリストンの子の) をいろいろな順序で何度も書き直

15 Goody (1987), 180–2. See also Yates (1966/1992), 17–22 (1992). 蠟の書き板への言及は擬キケロ『ヘレンニウスに与える修辞学書』第3巻30にも見られる。

16 擬キケロ『ヘレンニウスに与える修辞学書』第3巻29–30。

した蠟の書き板が見つかった、という伝承からも見てとれるであろう<sup>17</sup>。

それにまた、ある探求の場合には、その対象を定めるのが困難な場合もある。『パイドロス』(250B-E)によれば、愛し求められる対象には、正義、節制、思慮などさまざまなものがあるが、しかしはっきりした似像(εἰκόν 250B4, εἰδωλον D5)を欠いた美を例外として、その多くは、感覚によっては——それがたとえ最も正確で鋭い感覚、視覚であっても——捉えることのできないものである。そのようなものについては、徳の探求において倦みつかれたメノンが発したようなパラドクス「知らないものをどのようにして探求するのか」が容易に提出されるであろう(『メノン』80D)。『メノン』ではこれに対して、「学習とは想起である」といういわゆる想起説をとおして、知らないものも探求できると答えられるのであるが、しかしこの問いに対しては、名前をとおして、という答えも可能であると思われる。あるいはむしろ探求を始めるためには、名前あるいは記述をとおして、探求対象をまず最初に確定する必要があるだろう(プラトン『第七書簡』342B)。実際、「学習=想起」であることを証明しようとする『メノン』の実験において、被験者となる奴隷の子どもに要求された条件は、彼がギリシア語を理解できるというただそれだけであった(『メノン』82B)。しかしこの場合でも、名前を声に出すだけでは、現在のまさにこの時、探求対象は、名前としてあれ、概念としてあれ、記憶のなかにしか残らず、容易に忘れられる。しかしわれわれは、書き物の形でその目に見える似像を作り出し、その存在を感じることができる。書かれた似像が本物の代理として機能するのである<sup>18</sup>。実際、われわれは恋に陥ったとき、恋人の名前を口に出し、そしてさらにその名前を文字にして書き記す。恋しい人(例えば、美少年のデーモス)が目の前にいないとき、ギリシアの恋人たちは、例えば Δῆμος καλός(デーモス、美しい人)(アリストパネス『蜂』97-98)と扉に書き記したのである<sup>19</sup>。

## 5. テウトの薬について、使用上の注意

しかし、タムスの裁定(274E-275A)——文字は記憶を訓練しないため、学ぶものの魂のうちに忘却をもたらす——が間違っているわけではない。重要なことは、タムスは、文字が忘却をもたらすための薬であるとか、それは禁止されるべきであるとは言っていないことである。彼は、作られたものの裁定者として、テウトの発明の長所と短所を指摘しているにすぎない。書き物は薬であり、薬としてそれは副作用をもちうる。それは、デリダが「プラトンのパルマケイアー」で強調しているように毒にもなりうる<sup>20</sup>。しかし、用い方を誤らなければ、それは多くの益をもたらすはずである。それは、記憶の薬ではないとしても、覚え書の薬であるとはっきり語られているのである(275A5-6)。人が自分で内側から想起しようと試みるときには、それを助ける覚え書として確かに役に立つであろう。

また薬に訴えるのが最善というわけでもない。医術は病気を治す点でよいものではあるが、体育術のほうが身体に肯定的・積極的な影響を及ぼす点で、よりいっそう優れている(『ゴルギアス』520B)。魂の健康についても、たんに薬を用いるよりも、適度の運動(訓練、勉強)によって健康になるほうがよりよいことであろうし、薬を用いるときにも、適度の運動といっしょに用いることが重要であろう。かくして、薬には、運動と関係した注意書きを添付する必要がある。実際、テウトの薬に対する批判と見えるものは、そのような注意としても読めるのである。

17 Dionysius of Halicarnassus, *De Compositione Verborum*, chap. 25, pp. 264-5 (W. R. Roberts). しばしば指摘されているように、最初の語 κατέβην(私は下っていった)は、洞窟に下っていくことを示唆している。

18 Goody (1977), 46.

19 Dover (1978), 111ff.

20 Derrida (1972), 118, (1981), 98ff.

テウトの薬について、使用上の注意

服用者へ

これは、心覚えの薬であって、記憶や知恵の薬ではない。

頼り切らないこと。

心覚えとして用いて、自分で内部から思い出そうとする運動を行なうこと。頼り切ると忘却が生じる。

薬を服用することで、知ったつもりにならないこと。

書かれた言葉を覚え書以上のものとみなさないこと。

書き物が提示する一つの合図に惑わされないこと。

不当に扱わないこと。

薬剤師へ

薬の限界を考慮に入れること。

ふさわしくない人のところにも届きうることを忘れないこと。

不当に扱われないように、あらゆる配慮をすべきこと。

このように注意するとき、タムスとソクラテスはテウトとは異なる思考の枠組みをもっている。テウトは知を忘却 (λήθη) と記憶 (μνήμη) という観点から考えているが、タムスとソクラテスは思い出させること (ὑπόμνησις, ὑπομνήσαι)、より特定するなら、覚え書 (ὑπομνήματα) をとおして自分で内部から想起すること (ἀναμνησκομένους) という観点から考えている。このことは、知と学習——これはプラトンにとって探求に等しい——の理解に関して違いを生むことになる。

テウトは正確な記憶を重んじているが、プラトンの態度は彼とは異なる。書き物をおして多くのものを記憶しても、それによって知恵が増すわけではない。そう考えることは『パイドロス』で批判されている欠点そのものである。典型的な例はメノンであろう。「ムネーメー (記憶)」、「メネイン (留まって前進しない)」と同じ響きの名前をもつメノンは<sup>21</sup>、たとえどれだけ記憶しても、それによってタムスやソクラテスが得ようとした想起には至りえず、また生きた言論が導きうるような幸福にも近づきえず、劣悪な人間となり、悲惨な死を遂げることになったのである<sup>22</sup>。

メノンは最初は、ゴルギアスが徳を何とみなしているか、喜んで語ろうとしたのであるが (『メノン』73C)、一度論駁されると想起しようとする気をまったくなくしてしまう (76B)。パイドロスもまた、リュシアスの弁論を喜んで暗唱しようとするが、言論の技術についてリュシアスその他から聞いたことを思い出すように言われると嫌がる (272C)。彼らが避けようとする想起は、記憶術を用いた単純な想起とは異なる。メノンとパイドロスは、ギリシアの記憶術による暗記は得意であったかもしれない。しかし、他の人に明確に説明しうるような仕方で、ゴルギアスやリュシアスの見解を思い出そうとする場合は、彼らの発言や書き物から引用するだけでは不十分である。そのため、思い出すことはとたんに困難になる。説明のためには、彼らの発言を総合的に眺め、それらをその意味にしたがって分類し、そこから一つのバランスのとれた身体が仕上がるようにしなければならないであろう。そして『パイドロス』によれば、そのためには言論の技術が必要とされる。すなわち、何かを適切に想起するためには、総合と分割の技術が必要になってくるのである (265D–266B, 273E, 277B)。

テウトが文字を賞賛するとき、彼は「想起」という語は用いていないが、しかし文字は記憶と知恵の薬で

21 Klein (1965), 44–5 and n. 32.

22 クセノポン『アナバシス』第2巻6.28–29.



あると言うとき、想起について考えていることは確かであろう。しかし、彼の想起 (recollect) 観は、図書館に入っていき、書かれたものを「もう一度集める」(re-collect) というようなものにすぎない。そしてそれは、ギリシア、ローマの記憶術において、ある場所 (locus) を選び、記憶にとどめたいと思うもののイメージを魂によって描き出し、それらの場所の中に位置づけておき、その場所に入ってもう一度そこからイメージを手がかりにそのものを取り出すようなものである。この記憶術を用いて、人々は心の中で旅を行ない、それぞれの場所のなかの各地点から求めているものを拾い出す。パイドロスにとって、re-collect されるべきものは定まったものであって、形や内容を変えることはなかった。

しかし記憶がとりうる形態はこれに限られない。先に見たように、最近の認知科学の研究によれば、思い出すとは、むしろ思い出されるべきことと、すでに知っていることのあいだに橋を架けるようなものである。それぞれの思い出す行為が、新たな解釈の試みなのである。そして実際、この見解はプラトンによっても共有されていた。というのも、彼は『饗宴』で次のように言うのである (207E-208A)。

われわれの知識もそのあるものは生じ、またあるものは消滅し、その点でわれわれは知識においても決して同じではないのであるが、それら知識のそれぞれも同じことをこうむる。というのも、われわれが[魂の] 訓練 (勉強、運動 *μελετᾶν*) と呼んでいるものは、知識がわれわれから去っていくから存在するのである。忘却 (*λήθη*) は知識が去っていくことであり、訓練 (勉強、運動 *μελέτη*) は去っていった記憶の代わりに新たな記憶 (*μνήμη*) を入れ戻すことによって知識を救う。そしてそのために、知識は同一であるかのように見えるのである。

テウトの立場との連関と対照は明らかである。人が何かを想起するとき、同じ記憶に見えるものは、実際には、古い記憶に代わって作られた新しい記憶である。『テアイテトス』(153B)によれば、魂の状態は、動きであるところの学習と訓練 (運動、勉強) によって向上し、それによって知識が獲得される。それに対して静止状態にあるときには、訓練も学習もなく、しかも何も学ばないというだけでなく、すでに学んだものさえも忘れられることになる。

## 6. 想起の助けとしての覚え書

想起というのは、『メノン』においても『パイドロス』においても特別の意味をもっている。なぜなら、『パイドン』に加えてこれら二つの対話篇のうちにわれわれはプラトンのいわゆる想起説を見出すからである。今ここでは、プラトンの認識論における想起とは何か、という問題や、また、はたして『饗宴』における記憶の書き換えと、学習としての想起が関係をもつかどうか、もつとすればいかなる関係か、という問題に入っていく時間はない。しかし、次の一点は確かである。『メノン』(81C-D)によれば、想起が可能になるのは、すべての自然が親近的なヒエラルキーを構成しているからである。そこではすべての項目が、家族のメンバーのように関係しあっている。すなわち、想起し、何かを学ぶためには家族的な関係のネットワーク構造のなかにそのものを位置づける必要があるのである。しかし、この階層構造はわれわれに初めから与えられているわけではない。むしろ、われわれは学習するなかで、世界の真のあり方を反映するできざり優れた構造を、自分で作り出す必要がある。それぞれの想起の試みにおいて、思い出されるべきものと、すでに知っているもの間に架橋しようとするのである。あるいは、探求を、道を発見する旅に譬えるなら (実際、プラトンはそのように譬える)、想起の各試みにおいて、目的地に向けてわれわれは新たなルートを築き、目的地にいつか導くはずの中間の都市、町、村等々に到達しようとするのである<sup>23</sup>。

23 このような観点から捉えたプラトンの知識観、探求観については、Kanayama (2010) および (2011) を参照。

このような、道を発見しようとする探求は、神的な知に近づく試みでもある。ホメロス『イリアス』第2歌484-6には次のように記されている（松平千秋訳）。

オリュポスに住まい給うムーサらよ、今こそわたくしに語り給え——御身らは神にましまし、事あるごとくその場にあって、なにごとくすべて御承知であるのに、われらはただ伝え聞くのみで、なにごとくも弁えぬものなれば——

オリュポスの高みから神々は下界の道を鳥の目をもって眺めているが、また同時に、どこにでもズームインして、応援する英雄の助けに向かうこともできる。われわれ人間は、地面を這いまわるだけであるが、しかしナビゲーションをとおしていわゆる認知地図を獲得し、それをより正確にすることにより、神の視点に近づくことができる<sup>24</sup>。この点において、忘却はある役割を果たすことになる。というのも、ルートがあまりにも定まっている場合には、われわれはそこから逸れることができず、新たな（そして、より優れた）ルートを見出すチャンスも失ってしまうからである。

ソクラテスによれば、書き物が意味をもつのは、老いの忘却のため、また足跡をたどる他の人たちのために備えられた覚え書としてのことであった（276D）。「覚え書」の特徴の一つは、全体から取ってきた一部にすぎないという点にある。その一部を通路として、われわれは背後にある全体に迫ろうとする。「覚え書」に記されているのは、人がかつて考えた全体のうちのごく一部にすぎない。しかし、不完全であるからこそ、全体に近づくためにその領域を探検しはじめることができる。同じ合図をつねにしているとしても（上述の(4)を参照）、責められるべきは書き物ではなく、そこに同じ合図しか見ることのできない人間の方である。なぜなら、同じ合図しか示さない地図を片手に乗り出していけば、いくつもの新たな発見をすることができるはずだからである。この意味において、覚え書は大きな価値をもっている。

『パイドロス』272B-Cでは、言論の技術の探求において、あらゆる議論、言論をいろいろな角度からくわしく検討して、この技術に到達するための、より容易な、より近い道が見出されるかどうかを考察しなければならぬと言われている。覚え書は確かに、いろいろな言論を検討させ、あちらこちらにわれわれを導き、真理の領域を探索させる。この道探しの旅においては、迷うことも意味をもつ。なぜなら、それによってわれわれはどこをどう行けば、袋小路に陥るか、といったことを学び、われわれの認知地図をより優れたものにしていけるからである。過去の探求者たちの書き物が意味をもつのはまさしくこのゆえである。

プラトン自身、そうした探求者であり、自らの対話篇を、われわれが彼の足跡を追い、生きて呼吸する言論を求め、真理の世界を探求するための覚え書として遺した。彼の対話篇は、そうした生きた言論の似像（εἰδωλον『パイドロス』276A）である。プラトンにとっては、感覚対象も似像にして覚え書（ὑπομνήμασιν、『パイドロス』249C7）であり、そのようなものとして使用されているかぎりは、何の問題も起こらない。しかしそれを真理そのものとして扱えば、そこから大きな害が生じてくる。それは『パイドン』99Dff.で記されているとおりである。だからこそ、ロゴスのなかでの探求法が必要とされた<sup>25</sup>。書かれたテキストも、人がそれを真理と同一視すれば、害をもたらす。しかし、問答法の一部をなすロゴスでの探求法の指導のもと、書かれた言論を覚え書として用いるなら、われわれの探求は大いに助けられることになる。

プラトンの対話篇は、それぞれそのような覚え書として意図されている。プラトンの初期対話篇は、ソクラテスの生と死の覚え書である。また、『テアイテトス』における対話の主要部分は、テアイテトスとソクラテスの対話についてエウクレイデスが記した「覚え書」（ὑπομνήματα）として構成されている（142D-143C）。

24 この神の視点への接近の過程は、ガダマーにならうなら“élargissement de notre horizon”（われわれの地平の拡大）、あるいは“la fusion des horizons”（地平の融合）と呼ぶであろう。

25 詳しいことは、Kanayama (2000)を参照。

エウクレイデスとテルプシオンは奴隷の少年にその本を読ませ、われわれは探求の世界に入っていくことになる。それは終わりのない物語である。というのも、『テアイテトス』は、覚え書として記された対話から抜け出ることのないまま終わり、そのまま同対話篇のなかでのテアイテトスの探求（あるいはむしろわれわれの探求）は、『ソピステス』に受け継がれていくのである。かくしてわれわれは、プラトンによって彼の残した覚え書の世界にとどまるように導かれ、そしてとどまることを受け入れるなら、そこで自分自身の探求を、彼の覚え書を読み、解釈することによって行ない、そしてさらに仲間の探求者のために、われわれ自身の覚え書を遺すことになる。ここでの私の話もそうした試みの一つである。そして私の話がたとえ間違っても、それはそれで解釈の旅を進める試みとして確かに意味をもつことであろう。

#### 文献

- F. C. Bartlett (1932), *Remembering*, Cambridge.
- A. M. Blair (2010), *Too Much to Know: Managing Scholarly Information before the Modern Age*, New Haven/London.
- J. Derrida (1972), *La dissemination*, Seuil (J. Derrida (1981), *Dissemination*, transl. by Barbara Johnson, London/New York).
- A. de Sélincourt (2003), *Herodotus, The Histories*, tr. by Aubrey de Sélincourt, revised with Introduction and Notes by John Marincola, Penguin Classics, 1954 (revised edition 2003).
- K. J. Dover (1978), *Greek Homosexuality*, London.
- J. Goody (1977), *The Domestication of the Savage Mind*, Cambridge.
- J. Goody (1987), *The Interface between the Written and the Oral*, Cambridge.
- J. Goody and I. Watt (1963), 'The Consequences of Literacy', *Comparative Studies in Society and History*, 5, 304–45.
- D. Groome (2006), *An Introduction to Cognitive Psychology: Processes and Disorders*, 2nd ed., New York.
- Y. Kanayama (2000), 'The Methodology of the Second Voyage and the Proof of the Soul's Indestructibility in Plato's *Phaedo*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 18, 41–100.
- Y. Kanayama (2009), 金山弥平「アルファベットの発明とその影響—プラトン『パイドロス』解釈のための「覚え書」—」 *HERSETEC*, 3 (No. 2), 59–93.
- Y. Kanayama (2010), 'Taxonomy of Plato's Wayfinding Enquiry', *HERSETEC*, 4 (No. 1), 1–21.
- Y. Kanayama (2011), 'Plato as a Wayfinder: To Know Meno, the Robbery Case and the Road to Larisa', *JASCA: Japan Studies in Classical Antiquity*, 1, 63–88.
- J. Klein (1965), *A Commentary on Plato's Meno*, Chapel Hill.
- J. Lehrer (2007), *Proust was a Neuroscientist*, New York.
- M. M. Mackenzie (1982), 'Paradox in Plato's "Phaedrus"', *Proceedings of the Cambridge Philological Society*, ns. 28, 64–76.
- G. A. Miller (1956), 'The Magical Number Seven, Plus or Minus Two: Some Limits on Our Capacity for Processing Information', *Psychological Review*, 63, 81–97.
- P. Ricoeur (2000), *La mémoire, l'histoire, l'oubli*, Seuil.
- N. C. Tronson and J. R. Taylor (2007), 'Molecular Mechanisms of Memory Reconsolidation', *Nature Review Neuroscience*, 8, 262–275.
- F. A. Yates (1966/1992), *The Art of Memory*, London, 1966; Pimlico edition 1992.